

芭蕉翁句解大成

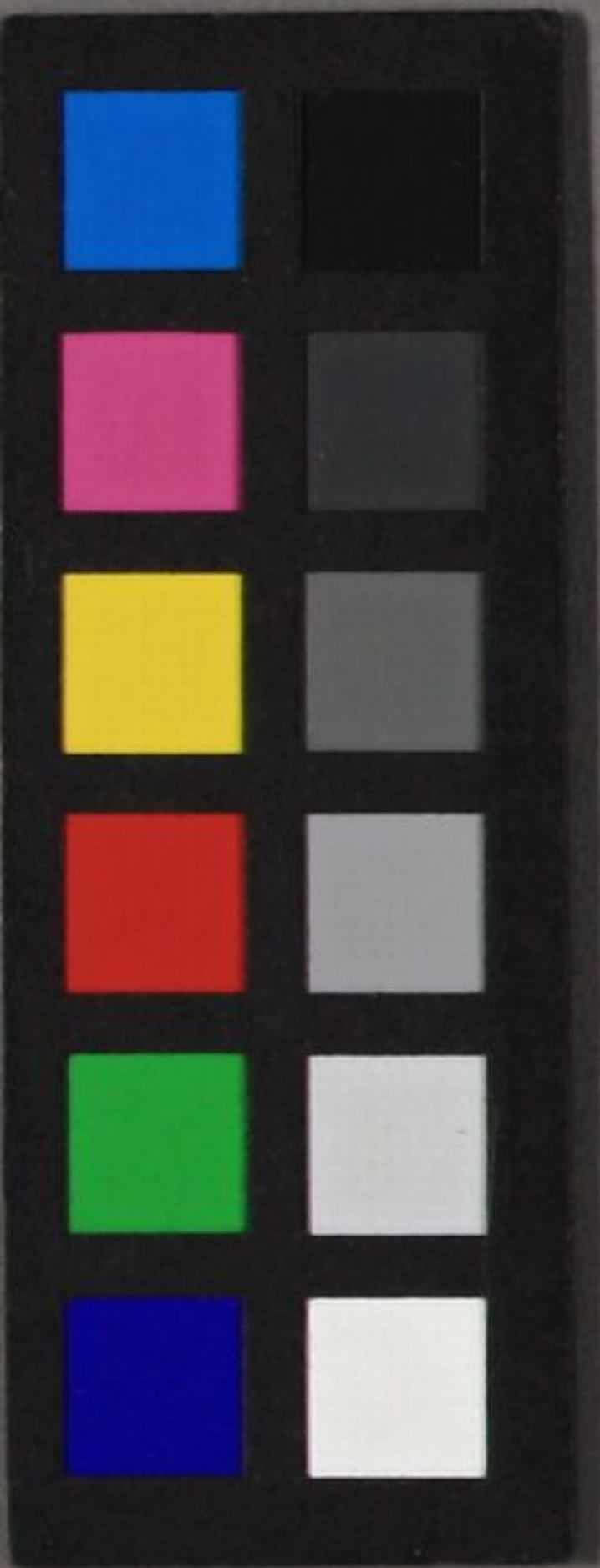
秋下

中村俊定文庫

文庫 18

829

4





初月や心くふに家にかよき
 待宵や松よきして初あけ
 いとの夢あや月まら 里のやけ細
 之白くもに思ふこと不たか
 月そしるへはさるへを 藤の宿
 新と天は下照 娘、月此良
 悪考下照 娘とあふ葉の 序よ思ふことり 余れ
 抄し味和言彦根 此妹よて天祖彦の女之
 かの阿妹志彦 夜と雪多葉 渡多廻行ふ小縁
 勢屋の本 娘をよと出りいし 娘之是を家此
 ちよめしん又三十一文 中よふさちたさるこま 葉盛
 ちよにえしやかり 出中よハ亭 娘の交是



妾や月同く千金は通 何
 侘々 以の月 編蓋の意を 仰いで
 侘てす 免月 侘 秋の茶 茶
 一本茶 あり 以の月 以の月 武花 曲の茶 茶
 歌 一たり
 いつれも 延宝 天和の古 洞を 下り
 侘 了す 月の二 台 何れも 是 非を 去り
 秋 腐の 虫も 月下 此 粟を 穿つ
 此 白く 古 洞く
 延宝 辰と 一 素名氏 何く 一 此
 侘 一 小 意 一 酒 意氏 今 今 守
 詠 了 中 印 戸 下 山 月

「白秋八十一」

延考 延宝 といふ 年号 あり 陪書 志曰 分 四 考 徳 三 光
 延 宝 祚 涉 無 量 多し 持 中 納 之 菅 系 考 廣 考 之
 一 本 此 中 新 茶 細 多し 吹 工 出 行 多 非 了 り 年 代 遠 二
 かく 何れ 煙 々 候 あり 白く 改 あり 何れ 中 たり たり
 二十 日 末 あり 其 の 月 かり 以の月
 一 報 在 たり たり 報 里 あり 中 二 報 信
 中 二 報 信 在 たり たり 年 代 の 終 末 あり 候
 の 中 山 あり 至 たり して 忽 ち 之 あり
 馬 二 報 信 あり 終 末 月 在 たり 一 茶 二 報 信
 手 書 一 杜 牧 秋 夜 詩 一 寒 空 動 馬 吹 目 色 一 滿 清
 石 強 夢 夜 魂 舞 美人 辺 思 你 孤 鶴 秋 出 塞 一 葉

暗辭林又寄紅衣香過々天外心の急を待とん
 愚考題早行。早行星尚在教里未天明不弁雲林色空
 河流水声月後山上落河入中尚橫漸至重門
 外依稀見洛城
 ぬ二の詩をたゞて登て乃るに何れ予ふ必取の
 詩に必定せり言よ一少此ふ思候ある此詩を三
 體詩に郭良の似る能く杜紫の詩よ白を合は
 せも急不可郭良の詩よ白を合すれ才とを書
 の杜紫よ不可是必名を是へ遠へる久之此紀初云
 深られよりと見ゆる郭良の詩を換字してなる
 よきたうなりり

腰間より汗をおひり襟より

白秋八十二

一囊をかけたるに千八の珠を
 指たり僧より似て若きあり俗より似て
 髪より我侍よりありと之も
 浮屠の属より半くくみ兼業より
 入るを以てするに等て外より似て
 化りたりたり一は不表の法はの
 らくく世打ちしよ又くくま
 よもたうき思ふに在れ身より一毛
 ともくは深き心を起しん
 毎日月より一年の杉を抱 巻
 愚考腰間より汗をおひり襟より
 腰より汗よりとて世中へうりり

繼一囊をうけても民院あり

浮屠 浮屠 佛陀 佛陀 借りのりあり

華表もろろ各々 籍柵 植衣とも書へ

杉もろ百枝の枝とて名よき

貞享甲子に記載よ公事するよにて子年れ

杉と能なるよ外文の臨帝をかすにあ

てしにす

柁外食も豊受皇太神とて國常立尊之

故略帝二十二年秋七月七日丹波臣余依那志井

系より度命れ山田系に述くなるに謝郡今

丹波系和納六年丹波臣ふ歌を新て丹後とれ

よ丹波と依那とあり

【名】 八十三

内宮も垂仁帝二十六年の法儀よりして宮も千

三百年不々に及ぶと内外宮と唱へ

上帝は少祭主公節の所小皇太神も要所た

りた内宮と稱し慶相も介所た

宮とすの内外の神合四万二千石

此道してとてす

愚考せりか

今欠きて一白文あり

手おし人を保る月見草

七嘉大鏡よ事

川 亦やよい茶も酒 能い月夜

抄言よ湯茶言の語も名酒法茶物よ皆山

珠海錯件、盡具庶不為凡流俗士と云く此意
を以て又「摩訶」

山まき、心の夜やあ 子 月
思考劉毛郷之詩猶對山中月 誰聽石上泉
そははなを、に共付く

「夜」既りと人よ及、此て月見え
思考秋夜の月を觀してまめの月を思ひて
此新し月を岡ををつゝして、此を以て化より
と手もを以てとあや、むへき、や

古情望、右をを流して

月や、此、新のま、此、日の下、面

特盛、と、能、役、者、此、本、れ、右、を、を、志、し、て、ま、い、て

解、す、ま、い、し、申、承、を、聖、徳、大、子、の、内、也、り、
して、今、ま、い、し、り、初、終、乃、觀、世、言
の、内、示、現、よ、て、觀、世、り、知、る、此、は、ま、世、阿、弥
の、あ、ま、り、を、六、十、六、の、終、と、作、り、し、と、り、や
を、心、能、の、正、辨、意、能、の、格、議、能、の、身、形、能、の
の、口、傳、あ、ま、り、と、り、と、り、

月、ま、い、し、り、一、指、し、雨、を、も、ち、ま、い、し、り、

根本、ま、い、し、り、終、室、よ、ま、い、し、り、人、を

して、海、省、を、祭、り、し、む、と、い、ひ

り、む、い、し、り、の、徳、海、に、心、を、め、り、

に、似、し、り、

寺、よ、ま、い、し、り、ま、い、し、り、新、ま、い、し、り、月、見、し、り、

一書よと麻子と傳てて根本すくすくしての冬く西上入
比多より出さるりかこもり敷たを渡りさると世
撰考此法こもり

是考考常徳公根本す考根本百名家にて佛頂像
所住おのり花出沙よ系源して代通すよと傳よ

菖か東菖に葉元佛ハ北窓の
君となす。牡丹ハ紅白の葉非
にありや世人よけのさる荷葉
ハ平地よ大くす水清くはきえ
ふさくはいつれの時めや梅を此
唄よ後すの芭蕉一七と伝る也

白歌八十五

風土芭蕉此心よ和かあむりむ
教採の葉をそたへ其地ふ後りて
産を伝しそをそめを葉ハ好端
もかくるたかアサり人呼て奉福
此名と守田友門人よとに傳りて
葉採りき根をつらつてそふよ
強ふれりる身くよとをたふらぬ
一とせよむらぬの初胎思ひ立て
芭蕉葉すくた根水むとすれそ
かれハ歌の淵よ地をかてり
更ちりき人くよとをたあふん風
れくハとあと返すたのこをて

てうのまき草のすくらみめし書跡
ねまじとりにありぬへまじりやと
をきき旅癖の胸よたくるる人
人れつしむる意のなかりひとち
あゝぬ院しぬも終よめとせの契
秋をすててふくむもせぬよ
候をすく今年五月のありを
花櫓の匂ひもすけいよきをか
されを人しめらまじりむし
よかすすれぬありり得まじり
てふくまき草もやちうら二君の
草をたつきししうねのねいと

白秋 八十六

清けよけつりあゝ木の枝お戸
あつたにせぬたつてあつて
南に匂ひ流し修えて水橋と
ちり地におまじり對して案内
系成さつたあつたあり海印の
潮三すの候よたへて月氏
るよ便らうらうれを初月
の夕をりあゝぬいよぬをうら
しむ名月のこまねひよとて
す川草を意をうつたさる系
度うしへあゝぬおまじりよ定修
或はまじり吹をれて風をた尾

をいづかしのまきぬをきて風を
かきこむたふくふまほくもたふ
らふくひ幸ふふとけいれとて芥子
あふら守被山か不村の秋木に
たくつてそり性そるそへへ侍懐素
も是に、幸ふをばいれぬ法枝
渠ハ新紫をえて飾ふの力と
やいとあり予其くくらびとん
百は落ふ抱ひつれ物さふれ
安き心出さるるぬ

○もせび紫をさくらにかり心毫の月

愚考の菊の虫に敷よきふる思陶例の如事ぬ

台村八十七

レと北窓の表とある是も一日も此表ありるへんを
やと王子殿のいひくく竹の落とたふ牡丹八月
あふぬとてはくふく初紫を偶あるにそくくは流未
なうれをけり他も歌の蝶と地を考へねをいり
よみありめへきしらと花柄様の昔名家の此方よき
つる、被落天錫と天林の葉も無き中流法現林
通千軍花梅つねれる事な醒中叶月御音ち
裡一ち渡、あふまよてさへかく比出と
屋橋の小木ひとハ屋橋と水船を云月の景あふ
も十二ヶ月分るのふたに「けくきけなくや又月の
空寂よかたしものたふをさふ此方比執よて
文のはくく我を味ふぬ

柴門景を遊ぶて斜く柴門を事文執襲二曰穴牙鑿
為戸上鏡下方水如生也 三龍詩二鳥車仙人白
鬼公掉頭為去又系風柴門流水依然在一路寒山万
木中半待と合セ刃二り未たへ七自然と合ふ
浙江の海之候工たへて弦質玉結小孰を巖壁言
荒荒又法寂寥樓觀滄海日門對浙江潮佳子月中
落天香雲外飄下略
芭蕉の系廣小して琴をたふしと号れり
廣東新語二曰草之大者曰芭蕉中略寸其大者圍高
一丈餘葉長丈廣尺至三尺中分如二幅白帛下略寸半幅
白帛の如くふつと流を掃て琴をたふしと号れり
下寧云幅帛二幅の物をぬきしとて二幅と号れり

芭蕉八十八

測りたよのかうもれと考へてと云々
琴今操二曰長二尺六寸六分廣六寸上曰池下曰實前廣
後狭象二弓也上曰下方法二地也五弦象二五
行大琴為君小弦為臣文王武王加二弦以合二君
臣のりさささ
半以をりて風をた尾以りてかーぬと云
輟耕録二曰鳳尾蕉桁二六寸丈圍三四寸直如矢以
上終生枝葉若棕桐状皮如松樹葉以風尾蕉
此專而略
又佩文韻府二曰沈明臣詩二龍鬚綠折風前笋
鳳尾蕉係兩後蕉
芭蕉既下風をかきしとて古詩二芭蕉開

綠扇又國華集に腕里贈辛裂斜規扇欲裁
皆足芭蕉を意に比寸事文敷裏に傍身を教
事に醒る

芭蕉より心を芥にありて以彼山中不伐の意本より
たくして心その心と廣群芳譜に曰芭蕉極繁盛
大者一圍餘葉長丈許廣一尺至二尺望之如樹之
それ山中不伐の意本より心とありてたゞものこ
花子二大本の章之テ不ありて一道遠遊恵子溜に
子曰吾有大樹溜之樗其大本擁腫而不中繩墨下
之三人間生南伯子綦遊乎高之丘見大木焉下略
其二人間生二匠石之齋至乎曲轅見樗社樹一其
大蔽半野之百圍其高臨山十仞而後有枝其可

以為舟者旁十數觀者如市匠石不顧遂行不輟第
子厭觀之走及匠石曰自吾執斧斤以隨夫子未
嘗見^二木如此其美也先生不肯視行不輟何耶曰已矣
而^一言之矣散木也以為舟則沉以為棺槨則速腐肉
以為器則速毀以為門戶則液樞以為材則蠹是
不材之木也無所可用故能若是之壽也曲轅在
山の谷之匠石と樗番匠の傍くく大木に章の字よ
きしぬた山中不伐の意本とせり

僧代懐素と見よ等をとらるる佩文韻府志
林曰懐素居^二更^一多^二陵^一芭蕉直帶幾教万取葉代紙
而書又事文類聚に曰陸羽作僧懐素傳云貧無
紙可書常於^二故里種^一芭蕉万餘以供揮洒

十儿と三體詩よ實現華う欲題名字知相訪又恐
芭蕉不耐秋此外よ芭蕉よ文字よを書の例多し
此横渠も新業を見て修すよ力とせり
子寧云張栻渠も宋人よて宋名家詩選よ芭蕉心
畫展新枝新展新心暗已随又願學新心養新
徳不隨新業起新知一是等此白を注せり云云
凡兩よ破走安きとや此よ越るも此より一なるよ
拙いよ忘中し号守詩よ人牙の水筆を奪ふ性
ありけ人余以て云ると云く又必笑時と何か
さうきりるもあると世人よさく白の意も其意よ
たとくきりる芭蕉紫をねよかりむとる石川文山
不二の詩白扇逆掛東海天十儿と不二の形も有ぬし

袖日記と詞書あり元禄五年此記に ねも杉尾根此
う情を割り住居も有良と岱水うお教書を信子を平
名月のとそふひと芭蕉又本極てと云く
忍澤天和二年 武蔵曲といふ集の中より 既小
芭蕉は海桃書と出さる
予うあす 意の文候の内よ四友門人保よ書し
して芽をひき根をちて取く 小おくらる
り年くよとあり
されを元禄五年を成す本極てとありし
るる良岱水の物語の文ハ初葉よて蓮う語
といふ集よあり用へるは初任菴の記等と既
三返りすて再三葉よ及をれらるるも知へり

木下城懐古

○義仲の森 是れ山々月照く

愚考木下城宮腰岩と数原岩との間あり
山吹山の下を巴々河といふ是巴山吹の谷より
その川而して義仲の城跡あり祖父も六條新
官為義三男中刀先生義賢より子仲家
政の孫子二男約王丸とリ子父義良源朝義
平に討まて交際是を命じて木下中三村氏
兼遠に授け依り元徳の後木下次高義仲と
なり

一書より山々月照く山々のつきよて城跡の
砥波山の東に源氏の子とあり義仲の跡あり

巴山吹の塚ありと云く何そ塚のありを波のより
ありとてもそれとひくことあり

袖日記越え城の河書すくく城之越え城跡
く義仲平家と合戦して之後中恒三維盛の軍
を破つたはる知度太を捕り盛を始て交際する
橋より七る余誘を亡しぬむ山吹女も城跡破
山より討死すといへりよちうひく巴女も始て命
を中らうとて和田義盛に嫁して義仲家
を産むたれを越え城して是の月かたりの
とゆふへき次なり北国の合戦後討して終日
將軍とよく昇進したるに此らありを考ふ
義仲二年して木下、中下ては長れ地をた

覽古懐旧此一言を...をなげらるる...延宝四年の白を
此志を...細道の...

此心よ...越人...を...心...
越人といふ...を...心...

了...の...中...
了...の...中...
了...の...中...

かきまき馬に付て我をきり
とよのけり山崎幸野のこ
におしむりたりたを大け
あつれ居りたふ居りあつて
成なり又地もたひくのをし
を鞆めと聲をきりてあやま
ぬのそやむはなり過橋海
をと置て猿のそきたち休お
四十八曲をよめやれおきり
手はゆふたよの心地せし
よりゆくとのはへぬる免
たる一匹志布子をよめおら

あつてわれをかたつねし僕
かきまきおそく氣をみり
上より只海をよめおら
おぬへきりあつていあつ
は縁より見えたりあやま
事限つていひの流心よ
おきききを又ゆふもか
るも也とせきも迅速い
くささも森界よかつて
てあやまのや所を他ぬ
りりおききもれを求めて
ひくるとらあましやうけ

けしきむすしん揮筆のあはれ
 ちと矢をとりと出て竹の下に
 目をともち取たききとめき
 ふせはのれ道心の持懐の
 心うつすものおあひすしあや
 と振るしー我をささくさめを
 とんりのまのなをささくめより
 たる地あはれいのたさときお
 をつとーおひのあやーとどひ
 こもささくしーくさそは情
 のささくしとささくしてあはれ
 いひあはれささくしとささくし

台秋九十九

けしきむすしん揮筆のあはれ
 ちと矢をとりと出て竹の下に
 目をともち取たききとめき
 ふせはのれ道心の持懐の
 心うつすものおあひすしあや
 と振るしー我をささくさめを
 とんりのまのなをささくめより
 たる地あはれいのたさときお
 をつとーおひのあやーとどひ
 こもささくしーくさそは情
 のささくしとささくしてあはれ
 いひあはれささくしとささくし

玉座よりしらけりてまほしくも
海のしるしあり

○あ

あはれの中より前記書きし書か
重考書の中より前記書きし書か
祭に補親御影以上をあらわし
の神詠「おののけりやれまかりの
ちりゆのおもひよきまけりて
もてちりゆりてしるし
すそをまるといふも月くと
まうゆりてりてりてりてりて

百秋九十五

ちりてりてりてりてりてりて
山おすりてりてりてりてりて
といひりてりてりてりてりて
そりてりてりてりてりてりて
人を押さるりてりてりてりて
泪もさるりてりてりてりて

○使

使や焚いりてりてりてりてりてりてりて
一書より我りてりてりてりてりてりてりてりて
あまの山より月を足りてりてりてりてりてりてりてりて
あまの山より月を足りてりてりてりてりてりてりてりてりて
吾名お白むりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりて

りる母の映り老てむつりかりりれを八月十日
の取月のくま方よりりるたは映を山すり一採て
逐部りりり映り思ひくや山の頂よ居てよすか
月を見て詠りりりふくしきくそわらう山を
映持山と叫ぶとや

善光寺

○月新や四門四州と叫ぶとや

愚考の善光寺は皇極帝の御命を以て水鏡
と云ふ一本は月新命四門四州と云ひしと云す
る物なり今一之四州よと云ふ一と云ふは善
光寺を東あま山号する寺ありと云ふ云
一の御佛の寺四州と云ふと云ふは善光寺を云ふ

百秋九十六

やもと高野の抄にて西天生也其の光り又云
たり先四門と云ふは南門、空門、亦有か空門、
北有非空門以上天竺の四門之又法仙の四門あり
けり今高野の度類は是を法仙の四門と云
はるなり。是と善光寺の御佛の四門と云ふ
と云ふは高野の四門と云ふは法仙の四門と云
ふは高野の四門と云ふは法仙の四門と云ふ
は高野の四門と云ふは法仙の四門と云ふ

四州と則須弥四州と云ふは東弗善提人壽五百歳
南瞻部州人壽百歳西瞿耶尼人壽二百五十歳北俱
盧州人壽千歳と云ふは法仙の四門と云ふは法仙
の四門と云ふは法仙の四門と云ふは法仙の四門

まゝに同書よて月々日々も本く此二篇といふ所の
別り体況也本を差て行するより云々

唐添塩書録曰新暦二十一年甲申年一光三子
の所は元也本を差て月益長者一附属一
くく又百年の同元三子一て元を利益し
癸巳の年ハ壬申年に至るより一千十二年百
濟国ハ新暦二十一年甲申年一光三子
欽明帝十三子申上もて日なふ所と敬遠帝
壬辰年より二十一年の百津國新波の浦天皇を
の元は海也と説く玉より史より崇峻帝
より二十一年の百津國新波の浦天皇を
より云々ハ行儀の事伊那郡川原庄妹井郷が

百秋 九十七

池原光に宅に入せむひて後長なる公卿の事多し
曰彼ゆ来をを日なふ一れも事不常也水益
一ハ一ととの候も今の水内郡羊井の地も後
有た昔は地を所も光と云々云々
今れは光と云々一候所ありて凡二百三十余年
光と云々一甲斐佐徳を云々云々
如来ま光と云々家にす一子時推古帝御宇
浄土の業自余の教法も結了あり小聖徳太子ハ
欽明用明并守屋と云々云々
一てある三味の念仏七日七夜称名ありて
無を如来と云々云々云々

名号称揚七日已

此是為報廣文恩

仰願本師弥陀尊

助我濟度常護念

八月十五日勝會夏上

本師善光如來御前

別善光を以て就上あり善光視神紙を添出帳の中より
差入て付たり。善光摩音介より入て則ち返りしと視を
押出

一念稱揚無息苗

何呪七日大功德

我待衆生心無間

汝能濟度豈不灌

八月十八日

善光

上宮太子御返敷

又てくさげかた

「待賀祿天恨都告与皆人亦何於何都天急伽佐
苗良先

太子御返歌

「急人弥吃乃仰舟能通也耳衆後奈半誰渡源可
此念仏に功力よりして祖文致明用明の二帝を召を
て不返しとる。運佐の御了り悉く安楽玉に生す
と自法華を添出玉ひりり
中二度の御使潤子丸に消息よ

大慈大悲本誓願

愍念衆生如一子

是故方便從西方

誕生凡州真正法

我身救世觀世音

定惠契女大勢至

生育我身大悲母

西方教主弥陀尊

真如真實本一歸

一歸現三同一心

陀域化緣亦已終

還叙西方我淨工

為度末世跡衆生 父母所生血肉身
遺留勝地此廟窟 三賢一席三尊位
過去七佛法輪處 大乘相応功德地
一度參詣離惡趣 決定往生極樂界
法興元世二年 辛巳十二月十五日 厩戸勝鬘上
如來御返報

善哉々々大菩薩 善哉々々大安樂
善哉々々摩訶衍 善哉々々大智慧
卜後一々御表書

上宮救世大聖 御返事

第三度の法使より甲斐黒木と調子丸二人の里に
八建約より糸洞子丸々究駟より糸成消息より

白秋九十九

刈域化縁度脱了 平等一子衆生界
能除一切定業障 兆載永劫成菩提
濟度群生同教跡 恒願本師如來因
口稱誓願報持功 豈是固持不護念
法興元世二年 壬午八月十三日 厩戸勝鬘上

御表書より

進上本師如來御空前 班鳩厩戸上

如來の御返事より

汝是救世大聖尊 能度衆生齊如我
父母所生引導身 一切有情同利益
超世大願為過人 五逆重罪祇念者
六万護念名号故 蓮心執持生安樂

八月十三日

赤讀善光

御表書よち

大聖救世尊 御返書 云くかゝるや本二天四海
又ありへいも阿しん 月教を則み本くすれ六聖
徳太子にて七救世菩薩の化身中く凡人のふしひ
くかゝるへあささるの甄たり

浅水の橋をわさる俗いあささつ

とよふかの浅水細きの一糸あはこつ

と書るすこらる

○あさむつや 月不ぶ旅の羽をふま

玉考銀水し書り矣細さしれきり衣多具

「おはるつのはしと思ひてあされくもさつし」

自然面

たしむぢやひしきさくかの教むつといふ海濱
をさつて月足れ旅れあけたるをさつとさ
つさつさつ

浅水細きよ一糸あさむつと書きたれと今
浅水細きをさつにあさむつとをさつさつと
一糸さつ一糸さつ

湯尾峠

○月不石をつてあかきつ名泡瘡の神

愚考湯尾峠と越前之峠は榮店とて泡瘡の
守れをさつ

湯尾峠御孫嫡子 ☆

此寺に奉安すも之を鹿養とす一飯合すも之を鹿養とす
くして養を一飯養と見へり

今氣比の町神上村系寸仲哀天皇
の御座あり社所神さして松の木
能く上月のあり山寺の法中
心所表をまゐりてて一僧首
初ニ世の上人大氣發起ありあり
てしつうのふを川古石を
泥淨所のさやて系諸往來の
能く一た例へてよきなり并兼
小志初を若く見りては
砂おとすはつとて

白秋百卷

○月清一掃り張りて上

一書に遊行宗を本号時宗と云一邇上人至老祖と云
野大権現の告よりして諸部を掃り一掃定符々六
十万人の力を一人と云ふありては掃りてと稱し
本寺よりお初後法教とありて是は山清淨寺と
号し百石を以て此宗の傳を巡國のるを以て伝教と
一巻以て本山上人を隠居と云ふ二世の上人を一邇の弟と
して他阿弥陀佛と云ふ傳記是よりして代りて掃りて
の傳を他阿上人と稱し上人と云ふ歌氏要覽に曰古師云
内三有智徳外三有勝行在三人之上各上人ト又車乘カ説
ニ日本ニテ僧綱ヲ賜フニ法印法眼法橋ノ三位アリ此
ウキニニ初位法橋ノ僧ヲ上人ト稱ス遊行ハ林示庭ニ

唯遊 丁大同心ト口宣アルノ位階、沙汰十二令上人ト呼
ハ一派ノ新号ノミ然レモ參内ノ式ハ甚々差違アリトハ
湯モ字彙ニ水止也トあり、昇俗ノ云井コリノトナリ
控りハ持砂ハト信代トハ人廻り乃時カテ、以テ
地ノナリ砂石をトシ、社内ハ前後太ナシ、
中ナリトテ、今ナリトテ、以テ、
梯門ナリトテ、石を多クナリ、
ナリトテ、ナリトテ、
ナリトテ、ナリトテ、

○月 月ノカハ、角カトナリ、
是トカハ、心カハ、日カハ、

夕秋百武

ナリトテ、ナリトテ、

鐘ノ時ナリトテ、

○月 月ハ、一ツノ、

是トカハ、誠トテ、

斜山、

侍、

ナリトテ、

○月 月ハ、一ツノ、

愚考、

ナリトテ、

め、

一付くぬかの日向なる妻髪を
切つて席をまうつけられしを
今さらしに申出さる

○月さしとめ智々妻のをまうてむ

愚考の智光あはし流信の御り毛利元就のま
うらさしゆりおかし振用よそくといふまむま
まゆりし事女忌髪を切て後の便しして志をま
りるを世良のゆゆおまひくをせざるゆめく

正秀亭初命

○月代や膝よも不玉膏おうち

古ち敷月

○月乃ける座に吳しき新とまう

一本新もたしと出れを非さうか白のまう
世とめもすし牛の角るゆ角の付あまに酒のま三
よ宿業をすくらと仕やと用たまう見くま付ま
はさくお志れかごしゆらたまうとつくとままハサ
まうとつりし正傳を味まはるゆ改すし台のまハ
加こち新なる人斗とおまう

一書二名目や所よりつくとまか不たまうと出す
あまのゆやのまままゆりしまうとつりし味ひま
へしとまにまゆりし圓一矢百端生六宮粉袋無
顔色よくゆ心よかまう

愚考は美人のけしうて唯一人の媚ま字中歌
まうしつとままゆりしゆらたまうゆらかこち新と

不意より読後撥集「秋」に「月より」を
多きをたゞく命よむふものおやふとくちよめ心を
へよう味ふへ

○水伸なくして藤る 秋窓の月

愚考 江陰系負夜談去陸月光斜并屋の付きり
孫康の雪車ゆき管のたぐひなり

宋江戸ときけをいやき名まね
ともせハハハのさし身もたかそ者
けり 子ちち東山子仰り信を
尋ねて西りよとせ玉ひらふ
と一山京集よけせられきり
いの方々 行居るやと先その場の

白秋日記

からかーりれを

○柴江戸の月をそのまゝ 阿弥陀坊

一書よ去る空也無水く地多冥井必其冷以て常
唱法陀号一依号許陀井往して至晋荒魚曠野海
途邊貴撰一怨念許陀名よと世の人海に坊と
よふ又市上人とていり白中の阿弥陀坊是よよる
く

愚評空也ハ円融院天保三年九月十三日東山
西光寺ニ宿り西行の時代三百八年へきり此詞云
ハ西行歌集の末とす小をとてたたる

○月清なる秋も入り 秋窓の月
旅窓長板

九の交を記すも月能七ツか 耶

愚考長教を平ヤウヤと留りてよむへし九交を敵
て九の交ひを折て九の交記きしよとあつた
秋の長きをいふを心したる九の教の極りたる
かゝるつゝもさるものなり五教短教記於一或
九陽教也故曰九天九宵九根九柱九宮九域九
非必字有九也故九册九族九流九郷九府天子
門曰九重云

深川五本松とよところい舟
をさうて

川止とよめ川下や月能交
流徒著解よ妻

白秋百八

東順傳

老人東順を核氏よしてす祖又
仁君望田に農士竹氏と稱す核氏
ミツもものも晋子、母らるる事
ものさるる事、二十一年ニ
の月をやめ、枕の上よたさめて
をるるの情、家をかたしめるおひ
かきしりの床のけしり、たてけり
寸紙よ文科の台を形、て
大京の曲の巻よ陽、るるあり
とき、馬を學びて、恒々、
多、何、まの、公、より、傳、説、を、た、て

金魚能登の然あつて子一きき
とも世話をいひて名園の衣を
やうり杖をおて業を換取し
二十年のたしめ市店を山居し
かへて桑心よふ草ををまゆり
札をさゝめりすしあつたり
筆はすすし車よ六はつり
と一湖上よせりて東井の紙
をそとて是かたつり大隠の事
の人あつて

八月 弘安とて札の四隅の形

愚考本多末江州膳所の城をり町家の遠と見

白秋百六

へり末中かゝる傳説と書へ一傳説とあれを
何両又何人投持の小知なるへ
令色能登も蒙求曰後漢范真字史雲臨苗外
夷人受業通徑好遠時絶俗中略友を遊して賣
ト一有時絶粒穴躬居自若園里歌之曰甌中生壘
荒史雲金中生奥沈菜多まかゝる積多の慈
ハかの傳説をいひて少しきなり
市店山居も子寧云中書祿師の清源よ不ゆ
車よ六はつりて一は書よ苗る七の形よ五
車の諺あり
大隠町の人よと大隠も市中よかゝるの事
へ月日の端も札の四隅の光よ影よと子儀と源氏天

葉の巻よほ氏わしを痛よて小山の寺にまゐりて
かおたのりも世もふさこらふし「あはれもていこきよけよ
志つてい玉へりそつたまもれ心ふくか不りいてや
うかうの香ちとふやしみちせし」 又、新巻の巻
よ名香よ々からの百端のくのえかうをたまき玉へり
よ「も創書机の四隅よりみ又の糸をたれて利
その糸はほつつかにひつて白ふをりよくり」

蓑虫庵

今宵新巻よ一聖に日十六日

一書よ三又中新月色の付あり
一書よ新巻今集「大といふもこれ條以所よ牙を
志めてすけりたけ小月を思ふ」 心蓑虫庵の祖

翁の古以得笑社山申之此句の十六日と、それより言
はの初後とすべし

一思考一を知らず二を志し以そのふよむたきと未く人を
ゆき子た白し翁も用よ立以そら「言新とさした
人も撰集抄「曰後二条殿の所子持少信初見英」
尔をのそをし「みちをききし」みそ「れ、本らるよ
おつるをの月とよめ」新巻今集の序に
今宵新巻「新巻」して「そのれを撰写して「新巻の月
も十六日あるを今宵思ひ立てて連もるよ食す
と新巻をあつた」そ「そ」ものちりも人見の言
とた「りり」源せしを木の別れ月のむやのまつるを初
見ゆ「き」見え英上人の孫とされをあら西行上人

イ致英のありり撰集抄よかきとめて後世の見る
とふちやれきり又おと口うつよ白紙して感
美ありし之は英治初保元二年寂行六十年後
建仁元年勅告今集成西行上人今是英治初より
四十七年のち建久九年寂行かく年代のつまひ
かゝるにてと志ふへ

月下に見をふるといふ題を

月夜中孤怖かる見此

長柄燈本れ文基のつ書に

月の洩るむらむ此橋の板目

思ふ長柄燈も巖我て皇弘仁三年抄州西々郡
と勅ふ仍てかゝるん九百七十年よあるた今集

白秋百八

「よれ中よふりぬるものちはらふれをり此橋と
来とるのかり」

川音や五條は夕の古し

思考川音よて橋をわつしきるものく五條橋と

今此京近郊の河原よつれん子年十、後橋光

明院正保年中石橋よれとくも百余年よて

寛文二年大比嘉よつれん今又板橋と

月を見ても、き此きくもはするの秋

思考此香れ又文字漫たのよとて出れ此橋より

月を見ても波の秋れきひくさはとちかこち

きる何そよまももやを喜ももよもここし

源氏伝てよて今音も名月くと「又く不とそ

志はしちちをたてさむる月のふりこにちるこのたれ
しとちちをさむるまをさむるまをさむるまをさむるまを
そと月をさむるまをさむるまをさむるまをさむるまを
と信つくりまをさむるまを

家にはひとら海よもむとら月見が
愚考千載集一ありははくそくゆく月をひとら
りてやとぬ水のいうてちるまをさむるまをさむるまを
そよ二尾

未名も四角を新を窓に月
愚考陸士衛、安海山書止以月照找牖まのけり
まをさむるまをさむるまをさむるまをさむるまを
名月や雨の川海うす

論休のちち酒奥一ふの月

冥岸崎の人まをさむるまをさむるまをさむるまを
とふにたをさむるまを

不盡よここの名をくむる雪かま
まくと名月のねや茶う茶山
よと五白皆右廻く

氏義を悉時仁を先いで
政以去欲

名月の出る巾お十一一條

愚考武義も悉時仁を先いで
ちるまをさむるまをさむるまをさむるまをさむるまを
政子を執執るに味して執持職まをさむるまをさむるまを
政子を執執るに味して執持職まをさむるまをさむるまを

時定於公の執持賦とある是れは天子の嫡子祭時と至る
 常樂と云ふと号に於ては亦賦式目を作して仁也と
 を木と云ふ則ち十一條と云ふ式目を名月と見し
 見を考す所の存方と云へし是又延喜中の古細く
 名月や北國日也云々の説也云々
 又細道の云と書よ八月十五日と云ふ所の十と云ふに
 之を考す所の存方と云ふと云へし

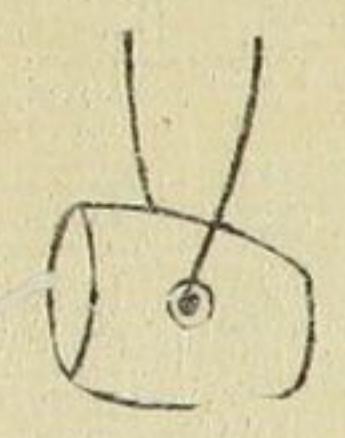
名月此ふ字も有ては亦田の月
 愚評此ふ文字名月や名月と云ふと云ふは亦あり
 もくやの字もその字ふましく人々もはとてててふを
 を考す所の存方の字のまじくゆるふも昔の
 ついで也非なり名月の良辰をれも大槩に括の之

をひめり

歌器の圖に歌す

おとささ身をおもへをさひりふ此月

愚考孔子觀魯桓公之廟有歌器問於守廟者曰
 此謂何器對曰此蓋為宥坐之器孔子曰我聞宥坐之
 器者虛則歌中則正滿則覆明君以為至誠改常置之
 坐側顧謂弟子曰試注水焉乃注之水中則正滿則覆
 夫子喟然歎曰嗚呼夫物惡有滿而不覆者哉
 歌器を元來一ツをれりも画くも三ツ並
 て書をり危し圖すも出り



歌不引ふをかこれこ

△信實と比す

十のそをこそ 驚愕于九阜 声同于天 是ホよてそ 死
順よりのるとあやしくもよくす 知る意を悟るへ

○ 名月 中 兎 ぎちちちち 不 堂 此 根

月 不 賦

六と一 此 琵琶 湖の月 みるく 志 七
らく 本 尊 寺 又 蘇 麻 一 して 孫 取
松 本 の 人 し を 僧 師 又 山 所 川 酒
を 擧 乃 て い 一 一 川 不 三 の 名 を 傳
へ 西 秀 六 三 葉 似 つ みて 伝 承 子
一 取 代 差 を さ 中 今 今 守 の 八 葉 と
い ひ 酒 と い ひ 荷 擔 の 人 も 二 派 不
つ り れて 海 邊 八 町 又 かく 不 きて

さ 等 よ 玉 川 三 教 を 詠 一 文 料 七
月 小 う 々 不 きて 甚 海 又 樂 天 三 話
を 吟 以 支 考 八 八 八 本 節 八 老 ぬ 智
月 と 山 の 木 づ ち ち ち ち ち ち ち ち ち
此 亦 ま う ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
慨 然 法 師 八 酒 又 八 八 八 八 八 八 八 八
一 不 心 ち ち ち 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
て 亦 仁 三 子 者 の 心 を た め さ け ち ち ち
中 中 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
洋 々 の 心 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
ハ 飲 中 八 僊 の 亦 三 八 八 八 八 八 八 八 八
つ 三 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

てもぬる襟ひをかくる月足の腕
 たるやとおもひしきき此葉の度
 に浮世の外此風を記を尋やり
 なく新く友をたふし此月の空
 かくて三杯の無よまゝして湖
 あり月よふ子をうかむ心とお
 母人の風情をさ清なり枝子
 飄筆以て筆よきなりんとい
 扇上茶籠此も男あまこと赤
 壁にまけしきたあふさめアそく
 なるやあお此溪の谷よおと清山おまふ

たりむうひ日段を塔川お物こ
 つつをくして比良のこゝ根を厂を
 かま川原しうしちよき羽の
 峰さく石山のかまを粟津の
 あししよきえてそくと柳橋
 此葉しをぬる心矢橋の福帆を
 未と此をゆつたけし似きる今
 名月や湖水こころよ小町
 されも我れ此葉式部も石山
 に保氏の侍をうつしるを
 の後居士と西湖よ歌女の上
 そげれをたふしつこも風

雅其名に流りていすは後不
ろ一にうかきさるむや美
し和漢其名流りていす
さて松もとくにふきをさし
とせて茶店乃操干島中
流りてなまてを目きよし
蓬萊其名を厚くして以
身もたぐ美事其名にら
るけいふ井の林乃流りて
たあしくして松の紅き
今一たををやを不さるるか
たふく月其名流りて

松もいとうやたてり古き朝の君
もゆかしく流りて尾不川のゆふに
を共るとよの尚白をふとろくめ
まをねるともやふ更よるぬへ
三井の門たてりやふに
士あや推教れむくしなかとみ
し今言れあそひをふもへたは
に韓愈々文章をもあさむき賈
治の詩賦をもとくきぬへく詩人
文字もとふかき藤もたふ
赤松れふ後とつふもそれ地
ふれ人を恥へきやと見ぬる七

をおもひにとくかきむの風流を
あつふふほつと一月を長き山の
木々るよへぬ

思心考

いつく川よみくは名をつてへ 瓶れまゝわきて流るゝ
いぢり川とよめるを瓶向うへ
位上二枚の蓋をさますまゝき磯の陶器あてて
有名茶をいんの地へかひくふゆ茶の對をとく
るの瓶の人し二依よふまてとく茶を下戸ゆき上戸
はち小瓶等茶瓶に文あり細のゆ文あり
まゝ茶に玉川く致をゆへ一盞全ち唐の茶人よて玉川
子と号りて茶に致を事文類聚続集よ云日高丈

五睡正濃軍將前門驚周公曰云諫議送書信曰猪斜
封三道印用絨宛見諫議面手罔月圓三百斤道
新年入山裏蠶虫驚動春風起天子復嘗陽羨茶百
中不敵先閑花仁凡暗結珠琲現先春抽出黃金芽一摘
鮮焙せ方旋封裹至精至好且不奢至尊之餘合王公何
事便到山人家柴門反闔無俗客紗帽篋頭自煎
喫碧雲引凡吹不斷白花浮先凝靨面一梳唯吻渥二
梳破三瓶同三梳搜和腸唯有文字五千卷四梳焚香
汗平生不平夏尽向毛孔散五梳肌骨清六梳通仙
灵七梳喫不得也唯覺兩腋習々清風生蓬萊山在何
処至仙子乘此清風欲歸去山下群仙司下土地位清高
隔風雨要得知百万億蒼生念即階上在山巔岸受辛苦

くるりたる一とく
 つまこの法海に心をつくらぬ友えりひを月
 尼の位するをやとハ徒然よれうち小彼なれ終
 「あーりやまよ野ねの枝此形の心を又をふのつ
 ううのなきを
 一書につましくいかに益者三友す一は米くす友
 多れを月尼の貴家とくはるすなり
 杖の瓢箪にやふなりれも病は榮瓶の表
 男あはれとくも子空云赤松をたしを杖の瓢箪
 を括りつけざるをきき子、持せざる必之く
 るとハ病のこも葉兵はよあふきをよてあふき
 える若る、あれを不自由をたしとく云く

白飲百十七

赤髯の母れと不きとあしめり赤髯賊後録
 賦種東坡の依たり前賦は吾と子漁推於江渚
 之上侶魚蝦而友麋鹿「洗盞更酌肴核既尽杯盤
 狼藉△後賦は歎曰有客無酒有酒無肴月白風
 清如此良夜何客曰今者薄暮拳網得魚巨口
 細鱗状如松江之鮓顧安処得酒乎歸而謀諸婦
 婦曰我有斗酒藏之久矣以待子不時之需於是携
 酒与魚後遊於赤髯之下焉、
 かくものにはほしきと此あをむ小乙州、酒正承乃茶
 連中、酒堂丈中支考水節智月惟純の業皆歴く
 此録字ありと自復す
 石山の清と業はれ光よさえてそんは楓橋のそおし

論錢買來玉尺如何短續出浪校直是圓白貨
四點細鱗巨口一雙鮮秋風想見真風味
是春風已過然此情此景甚佳味
在而今言之亦不覺其佳也
見へりし松江を吳國の地なり

古き郡尾花川志賀の郡もあまのこ
を首をかくとくゆる天智天皇居れ跡を
いふ久し尾花川一田ふふ
三井寺門たぐりなり
一書に賈嶋の詩に鳥宿池中樹僧敲月下門
諸注皆同

愚評これよく彼所既の象をさくして
きれりといふ論ふひとくくしてさくして
たぐりなり

へきこれ三井寺とありて
濟井といふは由來ハ天智帝
精水天武帝濟水持統帝
萃水三天子の養母と伝
井あり後ハ三井と改むかの樹
は常り一をのりけ
井よつづへりれを三井と
此門を敲て御井を
取らむとの料なり

三井の
漢のようつる月かり
韓愈の文章をもあさむき
とくあまのこく韓愈
字退之鄆州南陽人よ
て文章の名来なり
全唐文
をたぐりよ文章は多き
ら白樂天韓退之柳宗元
三傳たぐりよもその中に
韓柳の二家も胸れたる名
家とて韓文柳文此兩集あり
てせよはたぐりよ柳文

説をかきしるを以ちしるは皆それ此をまめて海川の
右池と一途と思ひ出て如法教をまゝにこれ等
初一人より眼くみて老にかゝる清浄なる所にかゝ
白者代を念をまゝにしる是思ふべきれす一之
そもく此より三字此傳とりしるあり多事思ひ
を在りしといへども念を以て一日柳亭氏にまゝ
折かく此より新法を修る柳亭云我は依徳撰の
集あり橋南と号しるより此より海書ありと
直に柳亭に入て在り書を一覽しるに在りす
此は前文あり如法好此心地して、孫令在念
是考した被古の二字に心自て了れをり大和
小ると先一これよりを修る是を以て折るる

たちやまら阿鑿^ハ咄^ハれ三字を以てり^ハ其^ハ其^ハ
を密宗に秘秘にして弘法大師三徳を以てり
其の他文の他文に比と号しる三徳よかごとり
て三教指帰を著しあふ三教ハ釈老孔の三道に
して後周の道安唐代法雲廬州の姚弋言等の
教書ありきりした大師毫を合て三教指帰を著
し親識の誑誘をふせき目しる禎甥の昏荒を
箴すまゝ
如之道に比しては夏文類聚に曰儒謂之世教謂之劫道
謂之塵云云是又三字にして教老孔の三道をしり
すまゝを表しる而後咄れ三字をあつて一表す
世劫塵此三字は死高けりし三字に代はるすや

扱か乃之儀も大和宮度御於此内之素樂寺百
海大寺 田中村と云ありと名は是傳も云あり
きつりてはこれ地を去るに冬あり守三つ此地を
巡りてねもりつり高み此月を觀し三教三味
三別をおもひさるる此初も亦この遠遠行くま
くくろく河書にあつたはるる。庭土此中虫聲
おろし身は情をぬしおぬへ中も亦葉葉
葉葉路もさくわさく書まふ。ま葉葉葉仁明
帝の御にめくせたまひて。此此葉葉をて
兼和葉と名身兼和二年紫宸殿におひて葉葉
宴あり同年寛海入寂元祿此にひまよるる
凡九百年にかたり。年号をもて名くはる福

白紙百世

の菊をれし元祿此は地色川の川をよるる
くろく少くはのうつる。このまかたのハ葉葉
葉葉葉の押込と云あり。たてものさりさ
るふと人丸赤人の以も菊をてん只葉葉は
くくにあまてたる。てんてん葉葉葉葉の
あま。平城天皇大同の撰此万葉集の後百
年。てて兼和の帝は此代母葉葉。まふ
まふ。知るる。大和名所図繪は云百海の大宮と人皇三十
代舒明天皇は皇宮。て百海村は百
海大寺あり。上宮太子の建ち。今も
廢して僅に跡はつ。まふ。水を古郷の

天主寺子又る時を門を子保りて夜上る
志げこれ詞書子叶たる

○紫を此志ぬふ所にあさのそ解

悪考ふとくする紫をの志ぬとくするやある
されん是も名月の限一詞よて桂ふすり
良辰の月也花はくはるる七部大鏡よあさ
けー見合す屋ー

名月の花々つてて棉をこけ
名月よふもこの書や田のくもり
續様への解よあー

十六おもやうく更科の朝う歌
悪考らなくの人やうはうううなるの歌かと吟さ

一本のまるとおれを林へ映け代を良辰よ
又て由に江戸にたへおいむき同歌よ十六夜を名
さるまるとりふへ映け山を更科歌まより水
内歌善光寺へまうて、ま白れうちにも更科歌へ
引通して止宿をたれを又と吟うる屋ー
まふと吟るるまきまに組おれ本意をまふま
ハ懐れ里より善光寺へ道四里よりまふま交
りて又更科歌よ止宿まうるまふに又て歌をま
まきまてまうて

お出れ候よこま

十六夜や海をまうる朝の方の言
一書よ魏志よ十州海中よま有日まうて一平の

を煮て終り熟すれと則 日を忍ぶるといふを
 くりて十六日此月とつづつに海を煮たりけるの
 骨を煮ると種たるとなり
 一書に十六日といへるとさして云々もお
 それ出るといふに於て海を煮たりけるに於て
 白くされと目していへるといふなり
 うら下に一元の間にありていふに於ていふに
 いへるといふに於ていふに於ていふに
 なまを

既正賦

白秋百廿七

予月此終冬に於ていふに於て
 と二三子にいさめられりていふに
 堅田の浦に在りていふに
 能くいふに於ていふに
 けふ人此來りていふに
 殊翁在る此月よりか
 事なりとありとありの中よりあり
 にいふにありとありとありとあり
 ありとありとありとありとありとあり
 をたらしめりていふに
 きりけありとありとありとありとあり
 ありとありとありとありとありとあり

榻をかりて遊遊を此へて
中六夜此宴を備へ月八まつ
けくもをく出た湖上を
にてりわさりかきてやめ仲秋
中此月を月此涼夜堂は
向ふを後山とつちまうと
宵を不そ此あさりまか
とかの堂上此探子にすれえ三
上水常のたを下にあきてその
同十二歳此影をひくれば
角りふはくは月十三等より
運せられちんかく遊まうれ

台秋百廿八

水面に玉環此影をひく
あつたに千騎佛の光をそ
津やいとよれにやを世の中
てかふふく月のをくま
とは京極美川此歎息の
まを成来を々宵も此堂
にあそひあつた心信此衣
をくくあつた常観此衣
まを成来を々宵も此堂
あつたに千騎佛の光をそ
津やいとよれにやを世の中
てかふふく月のをくま
とは京極美川此歎息の
まを成来を々宵も此堂
にあそひあつた心信此衣
をくくあつた常観此衣

て姑蘇城に於て清く静く坐す

鎖鳴て月は入上 淳 師 堂

愚考 何う一成秀守 亦くそ 榻を之 千玉篇 二曰 床 狭して長し 則腰からけり

釈 籍に 切目 せしめし ありし 孔子に 切 目 せしめし ありし ありし ありし

仲殊 予は 日ハ月 浮出 堂に 長向し 瀟山と 云ふ

了又 了せし 三上山 水蓋 山に ありし 瀟山 予の 外に ありし

三竿 合て 日如 洞 ありし 二尋 ありし ありし

百秋 百世九

おし 牛に 西上人 ありし ありし ありし ありし ありし

千 辨 仙も 浮出 堂に 安置し 閑泰も 真心 信教 ありし

ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし

王子 猷 居 山陰 大雪 夜 眠 覚 展 室 酌 酒 四 子 皎 然

因起紡皇詠左思招隱寺詩忽憶戴安道時戴
 在剡溪即便夜乘輕船就戴經宿方至既造門
 不前便還人問其故王曰吾本乘興而行興盡而
 返何必見安道耶
 後川多比良後川とつきて望田は西なり
 姑蘇城外秋清もも張繼の詩は月落烏啼霜滿
 天江楓漁火對愁眠姑蘇城外寒山寺夜半鐘
 聲到客船則拂曉は侍をいふなり夜半鐘聲
 は後教よりありはよごと同輩よて秋の悲情
 たりは淡明てもも良夜とも定めて満月を
 入る宵ハ戸さるるも仁年今宵もと顔
 ふらふらへ

百秋百三十

いさよひもたうらひに雲れり
 悪考此指をいめを西の初としてる
 とも再案なり
 やれし中出ていさよふ月夜中
 針立や肩より揺らつかうの初も
 榊亭之延宝三年五十番句合よるなり
 近江路をいふふは日笠山の
 道して胡弓といふものよと乃
 衣をくまき
 剥れ半るる身よを砧にひききか
 ちよらうて北斗の初くきあふか
 悪考事文類聚曰星之為言精也陽之榮也

陽精為日日分為星故其字日生為星云々
北斗七星第一天拒第二旋為魁第三機第四權第五
衡第六開陽搖光才一至四合為斗居陰布陽故稱
北云々白泉天北斗星前檢旅尸南樓月下橋寒衣
かよふ此傳ふ似しや

昔也云々或坊一れをかきて

伝亦云々我もすせよや坊々 妻

素堂云云坊一得陽大にのわたりて系天を伝
一あるも高人の妻れ志をなすれや坊々妻の伝
ハいふよおていぬをなくさあ一もやとにすすあし
りれそ色をいのけつ是ハ禁れ坊地をかふふ
とゆゆいもく心と云々

一書よふと一山の秋風さよふけてふらさくさく
衣らつちつと法は是をておとる

愚考此分ち衣らつをよらとせうちまきなる
斗す少つちくあてすせよや坊々妻のとく
字眼るれた必琵琶の操写多感と終れなし
その給弓ハ琵琶をあらと一多しを妻を傳と
一て伝よ代ふ皆是と云おた

事文類聚曰琵琶行白居易 元和十年予左遷九

江郡司馬明年秋送客湓浦口有船中夜彈琵琶

者聽其音絳然有京都声向其人本長安娼女嘗

學琵琶於穆曹二善才年長色衰委身為賈人

婦遂命酒使快彈一曲罷憫然自叙少小時

歡樂莫令漂淪憔悴得後於江湖間予出官二年
怡然自安感斯人言是夕始覺有迂謫意因遂長
勺飲以賜之凡六百二十二言命曰琵琶行
浔陽江頭夜送客楓葉荻花秋索々主人下馬客
在船拳酒飲飲無管弦一略ス

猿引く祖の小袖をきぬぐう形
鬼灯と実も葉もかすもぬるふれ

一書に万葉「橘々紫々」必々をぶ実の一枝は
葉とけ葉とけ見ふ此意を以て鬼灯のまづ
かすもぬるふれ

愚考「橘」を奪胎換骨したるも「鬼灯」の
のどけ字大切之橘も葉とけ鬼灯のまづ

紅葉すくるといふ葉別れてふをなまなり此古歌を
くして唯の白さうら鬼灯のまづ俗に定法なり

くすくす何かしく像に

あゝ雨を春中に負ふて柴胡塘
誰か雨そ木棉たす秋夜雨

古「さ」みへこといふにふくしてさるるをたの
かるかすそ木綿もさるるをさるる

江陸に魚ありやすくむ不ニは

愚考「江陸」の魚、鯉、鯪、鯪、水陸の書方ありむ
子曰江湖中にあり俗説「さるる」湖よりぬけ

るといへるかすくむ不ニは湖よりぬけ
鐘る比新見む笑のやいし

五考麻吟り代おかしき事ありて
後代に後述にかけ居るといふ事
なりむちちの
訃の奪胎振骨なり

言は後火乃題を好す

一書火二飯やちり下むせむ

一書云先づ昔の飯の後の後火と
此の字あり今も枕妖多に此句を
一おしとく多きをあやふく
字にまうてくい海を飯のあやふ
魂をんんんんんんんんんんん
心よりしと見や人とて作は後
一書一いややれはつらよ「あ
あやふ人のあり

白秋百三十一

とかりくとちれおしあやふ
まくよまへそふれこちり
東寺なることなり

サ秋比 種やかしらるを ねん 誕生に

愚考東寺ハ本朝年代記百桓武帝延暦十五年此
草創藤原甲勢人奉行ス寺領廿石余秘密行法
弥勒八幡山普賢惣持院敬王護国寺と号す大内
裏代と号す西寺東寺と並ひ西寺と号故よ
給ひ東寺と号海に給ふ西寺ハ正暦元年炎上の後
察れと云く此は門々同延暦年中少建源頼光の四
天王渡辺源敷と号す子源五綱変化退治のつら小
児もまゝなるの傳なり

仔細に斗從に山系を汚して

北のまへにまへにふてもてまへに山系に

続猿蓑注解よ委

かつてあつてやもは終迄ぬそは此世

袖日記に此句を冬人給み出れり非たりきそ
はの帯もふて赤きもはきしれは句中おのり
まへにあり

長月のはし先古郷にありて山堂

萱中も雲枯たつて今も流るに

さしにたつてもむらりにかたつて

さしにたつてもむらりにかたつて

唯いのちありてとれもてて

たつて

まきに見れやる事とて母の心
髪をこの先よとかれ浦崎の子に
まきに見れやる事とて母の心
とつて

手にしつてを流し涙をありて身秋の妻

愚考井澤長秀の俗説并よ云日本記に権昭帝は
神皇二十二年七月丹波に餘社郡安河の人なり
浦崎の子を産みよつてあり舎人親王は日本記
を養上せしれしと云ふ帝は養を五年四月亦
一日と編日本記に又しり日本記にり兼あり
屋敷を流しありてを如何と云ふ
お浦崎の子泊よありて大急を流ししと此巻記して

美女と女は女と俣して道草あは朝の二百に十年を
経て古守ま歸る心は流女一ッは玉もいおを授け
は笑ををひくくするたの道と密く制してあれるを
たのひてひくけを忽白髪のおと女と云く、

兼好此贊

輝乃板をさしるに仕きる法師

兼好のつらさや都大かえよくらや

車庸亭

秋の夜をくらり露一ささるる歌

胡蝶云及日記此白ハ寂莫枯槁の場を踏やうなる
老後の活斗何もれらふひれを心と名感一ハあ
ひぬ源氏日記裏の巻におる、これ世にさるる

もれきたれをむくかこもかさくらす人かま
く成ゆく多く又宵石れきにさしきくこまおぬ
世のあさるももぬいさゆさこと見えへさるか
ささるよりひくく海戸れかかおけく
中七文をよめさまつてさ下あ文字へもつま双
れる法と又え波うみされ記まもいさあつてさ
流りしてら組のるささくつてあさるさ

曲女亭

入麩れ下焚きさるる板さかよ

一本は乳麩と書きた非さり成をつて入打入さる
ひのりさる

六助六云糸のふくりに奔を

訪して古口の安否をきく
笑ふ更へ半らふもしやあきの暮
思ふに實途もかや秋れ暮
延寶天和の古酒さう

大垣にとつてさうさう心細く木周り
家をさうさうさうさうさうさうさうさう
帰さうさうさうさうさうさうさうさう
けけを

死もせぬ旅病のさうさうさうさう
野下の旅行を送る
又送り北さうさうさうさうさうさう
船頭の風さうさうさうさうさうさう

百秋百十六

枯枝に鳥のさうさうさうさう
此も七絶大後およひ能論語さうさう
秋れ暮 男さうさうさうさうさう
此れ東門西行自れ像さう

あささうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう
とさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさう
五考北の雲行さうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう

此寺に（あ）りて画もぬく見及なり

京の清ありて泥足の集れ能

清僧ふしつとてき新思

又

曲和翠子に逢へられて

けしとち和新人さすに秋のこはく

悪業すしたに九月五日曲和翠子に逢へられて
の志をうととちとてき新思のすけりけふ同下
月十二日大坂よかいて清僧の何れも拾ふべき
るるをれをあるをさすて逢ひてある僧を叩く
上手に手くふつとてき新思
有據之取清、秋日此清ふ匹照入園巷古道少

白秋百三十七

人行此外諸抄に解皆ありてさしハ記され

人夢やホふとちかつて秋のこはく

一本の此白行人さすにけ白より先よか人同討の
吟

女丈麻巾毛に色う披ふて毛むつり

むさしけ巾一寸ありてまのこはく

二白とてに寛文延宝に吟くもや

男麻山

ひねりこらとて女麻もよる也男麻山

榊亭とて男麻山とて桑州の地とてを古綱とて

ひねりこらとて尻あそびとて杖に麻

山中とて

湯に石紙はくしを肌の手かむ
柳亭云此白芭蕉翁山中居居れと手大岩の
に枕夫の書てあつと云り

免答りて別聖まふく志つひ
て筆中数株の木まふまふ
二かしと受回柳翁の書休ま
うてつと云

祖父と親その子れをや柳翁
松竹やひくくちらと云 猿 犬 面

中ぬまき
置ふてて柳の本もぬまき
是ハ伊賀の行跡とよまの門人云

幻何葺くと事由去来に對す

菟 菟と柳とこれきそのれを
愚考はあまやくと通にの衣袖と云 望田の事由
う對は柳に候我れ落柳舎去来と對はるの
云と云

秋風の吹けと云き一粟れいの

一書に云僧正通照言「やの意を松を附雨の際
多そと云書と云に候と云と云此くのいの
のむくつけきたつと云と云と云て面云し
愚考は葛々系れと云大信云是系の云と云
あつと云是社此をよむかつと云信と云と
浮れさつは試と云の題を思て云と云也

凡むしうまひすも乳嶋をへりて則敷山
さして高きれ歌をききされりゆれをさしき
ととありき 雪ふりも才より引きあるも一高きれ
たふさすの羽衣ふささるるむ ともありき
感動の予人の存するの存所を志るといふ法よひ
と一高きも是ハ高き相の秘するも信するも
客をかくやんくくとよみ出さるあそめて
僧ふまかひしりき人より見しりて云わさるも
さしきもその佛掌に終たると云く十時一首
「人」といひらけくやをあるもれを我よと
せさきしすれちとよきりむされハ流もすき
あそよの上さすれりあそり親れハ病の内

よ不教奈とあり法及皆かくれこと一書れを
からにしてあしきれもいすことあり

亦若れ椽うき世の人れい中けか取

一書よ殊に亦若れ山深く谷くろりしておのつ
から市ありを歌るむりりりよくはかくまよへ
了道心の人く多しとそされたりき世の二空に
ちかあり晋執事虞入南山風甚拾椽實而食
又杜甫の詩ふ歳収椽實随担公

一書よ徂徠先生峽中記よ泊上に曝せる椽実を
乞ひて東都純緒子にみやげせむと一りるに
不図そを奪ふてたよ書り田者吾にチラヤを
とくつありき

如水別墅

心流り居る本家より交捨せしや
愚考莊子に曰果哉有理聖人遭之而不遠
果ハ亦なきと雖も中は寧ろし何のよも一きよ
まことふ是聖賢れ教をもちて境東を云
すり果とてくも怪く思ふへり昭宣公も葉
をりて必以て年此故に梅よほくを裁り
あつてとて此介に流流略しぬ扱や水を足
流玉大坂の門くさるや
秋をく経て際もまめも葉の霜
灰塔よ屈原の離終行上朝飲亦蘭之塚土
露一夕夕食ニ流葉くは落英ころし

夕秋百四十

落英と始英をりしや志のれを祀給し
まはしとては葉の此葉のあをなめれ上
と観しあふちと

盃 死下切もや 朽木 盃
盃や山路の牙くと是を不す

朝茶のむ借 静すり葉の花
望田をくれ瑞禪寺まで

起 何れれ菊ふれちるの跡
早の庵の雨

愚考葉を仁徳天皇七十三年大夜とて
すめり出せれと云く又言鹿おは稿の

株とて自然とせし事ありと云
陸佃埤雅曰作鞠從鞠鞠々窠也月令曰
九月菊有黃花至此而窮其故謂之鞠云

左折亭

そやぐ嘆け九日も近し宿の菊

袖日記に古柳と出はれも非たり

左折とてふよと陶淵明く五柳と菊とを以てかけ

合せしり七部集に左柳とあり

胡蝶云杜甫詩に管筍新甘菊秋時晚青

葉采守陽不堪摘有日蕭條盡醉醒殘花

探櫻開何益木のあらしをりふたり

嘆け山道の菊を物筆也

一書に此句を松山に數千の竹筧のとなくたる
を山路の茶乃嘆くも似たりとてふ山路の
葉の竹筧かと倒を撥むひきも句法たり

小海の残竹はして加州山中の

温泉より治すも功有馬に次里

人りの此はも枝葉三つの名湯

の其一つたりまこゝろに浴を爲

る者もあつたれを皮肉うら

不ひ筋骨もよそはらして心神

ゆるく倦し氣毛もとの婦

公地に彼折原よみ成るひ

意をまゝ茶の枝折もあらず

山中や菊も手おぬ湯の白い

東野菘話云山中の湯紫帯湯と云白湯湯
と云ふ昔長の何某此亦二翁を特一多へ然
白湯を此をひきして其疾愈らるる事あり
旧記より見ゆ

一書云張鼎志云菊曰延壽客

列仙傳云彭祖服菊長壽其年七百餘歲
且考名湯之上沢原津拾又有馬を名
言一山中と云其云此外熊野本宮と云
名湯と云し亦此等猪手とい語くの説を
あつとぬ乃一又

ホ下夕秋百四十二

やせたるつらわたりさき菊の葉が
亦周知なりつ道も美法の内人なり

葉は赤を産して五へたぬりしが
胡蝶云見も菊の白法なりな於文法
二も菊を編幅よりてもけ何方もよきと
云とさあは白もぬりこの考てひろへた葉の
多しと云る取と志のつよ

田原云やとて

物扱れ蛇もめてき一葉の字
是もかの齋縣の葉を本もひとやておかつ
之つ論くむ蛇は長毒のさるるを葉の志と

白秋百四十四

やまありむと旅しきりさき

望田の何うし木既馬の

兄の事よすまのつれしよ

さうさ茶をたたく酒をま

てさきわらさるや菜ハ珠の

くちら菊の花の胸いとさき

けささ

葉ももすて 破を明し葉の胸は

愚考ハ珠とつちさきさきまうて後世の

ハ珍々稱する 竜肝 風髓 兔胎 熊掌

豹炙 豹蹄 狸尾 狸尾 狸尾 狸尾

ハ珍々稱するもれあき

或人葉の事て胸の破を明ふといふもい

さるるす中見本をいふと破れまうて云

もさるるす中見本をいふと破れまうて云

アそるるす中見本をいふと破れまうて云

識南孝廉善斫繪如穀絲綫輕可吹起操

刀細書捷若合節奏固會客樹枝先起魚架

之忽暴風雷雨震一声繪卷化為胡蝶飛

去矣南孝廉恐怖折刀誓不復作

もーやまをさるるおしひさるるるのさき

むくと烟をするる

おふーも破すまの葉の款々ま

愚考魚肉も香と書葉の款のさきの款

と書す人て精進も代ハ款と書よ志のり
輪ハ精進をくも勝と書よくもくへ

九月九日乙卯二杯を撰

へきくくくくく

くはれ戸や日るきて異一菊の酒

愚考事文類聚曰九月九日身酒坐難逢
叢中把菊時王弘酒を送り来り此後家
求くも数くあり是陶淵明く借さる
酒に聖賢の名にる魏太祖時禁酒人竊飲之
故難言酒以白酒為聖人清酒為賢人云々

岱水亭

新傳や葉の香にすく直高岸

愚考系も中系新系とし月信日待の新より
か〜〜

ハテ堀も

森久の系さくや石屋の石れり

愚考系木の系系をいふさありむう〜武義
野まで八丁の堀あり〜の今もその八丁の堀を掘
みて〜其の形をち〜人々中も石屋のあり
てそれ賣衣れりか〜葉の漢出せると〜是言
堀も新堀もあり〜八丁堀の酒書のご〜こ
さ〜を兄へ〜彼両も〜初め時ををま〜と
いふ酒書よて返國て酒書は〜〜〜き〜と
いふ白を志〜り〜法と同日れ端〜とあり

それを見てもすなわは同書を重んじてるを
集めてあるものなり

大門通をさぐる

桑原若や古物店に菅戸の業

愚考大門通とてふとじうに菅原の業
左落系と書しを文字代りてしるを
菅原とありしを菅原長の以てて定りし
傾城町とてふに二軒云々分たし
糺甲八丁目 滝金川岸 菅原橋古橋の内道三橋
かきよと二三軒ありしを傾城屋とてお
治の上出敷しと元和三年元落系の地二丁四
此傾城町清免あり菅原町惣名を志す

此傾城町三橋のものを江戸町と名付同武丁目々
滝金川岸の老落系町と稱町の老と元落系町
とてしるに其の地を新名付曰武丁目々
を以て新落系を志し其の地より東の山麓かく名付
伏見町の元落伏見とてしる山麓かく名付角所
とて新落の角とてしる山麓かく名付以上四
く寛永三年廓令く成れ我るは町家多く
ありし月明曆二年元二丁よ三丁代堀下して今
の新吉原へ移りし頃此頃より後揚屋早付町と
稱すは町号を付しとて大門のうらちを區志
此新落たる及み陰をり未入る年をゆるす
それより江戸中かく一葉女一統お止り

あとの暦二年より此元禄とすまてやうく二十九年の
事なるに全盛なる名妓の競ひし事あると
波古物語にありて全まつて覺古の志もあり
つてを今迄の事なるおもひおて菊をありて
あつたききけしありけ中の事なる人をして
明美のあまらるるおうつり星かたるたのまき
を乗る菊つらまき吉原の侍れ共としくけし
を中しく凡慮をもて揮すへかしく

菊女り亭

あつた葉の目よきて見る歴し
愚考西上人くもアさきかす見のつしよの事
代目よきて見る世とおもふし中興の事

かゝるへきめ也

南都にて

菊に香や奈良よきふるき佛造

愚考葉のふかれた一通のおもむきよあそ菊の香
やとあるを貴教の香して一通の事あり
奈良の大佛と人皇四十五代聖武帝は
たう天平十五年に位樂まで造立し同十七
年十月初より佛原を國公磨るりそ
春日といふ佛あり河内玉妻の村の人なり
名を初會統主勲の兄なりし後五十
四代仁明天皇をめて葉を造りし
せよふ友なる良き古き佛造とす

二菊をとりしりありて一々を執すと云
之をとりしりありて一々を執すと云
の佛工教しあり

ましく此書や亦る古を幾代の男
此もましく一々を執すと云

くかてて下り

業 此書よくかてて下り

くかてて下り 津のふはるり大坂御城見ゆ

菊上出て素良と難波を夕月と

野坡の初便よ云此白首より新助互殿といひつ

おりしりありて一々を執すと云

此書よくかてて下り 評判し

百秋 三十八

つるすり世彼の幼へよむとてぬし見へ

康この金花傳よ云新助とて難波をとりしりありて一々を執すと云

の古教を討しりありて一々を執すと云

夕下此自をえりしりありて一々を執すと云

れ字よみ字とてぬし見へ

ありしりありて一々を執すと云

よみ難波しりありて一々を執すと云

悪考此書よ云新助とて難波をとりしりありて一々を執すと云

初心の為よたよ云云。康子解もよみしりありて一々を執すと云

影 略 互 顯

カケ ヤッス 夕月 アラハス

菊よむてし

九日京を出る

十日

奈良 夕カヒニ

宵月夜 共ニ非ず
宵月夜

カレヤツス

九日京

夕月夜

と留る

は道法
あまのりく

難波 アラス

かゝる事法をもあつて種々の妄修を
いふはかゝる事法をもあつて種々の妄修を

菊よむてし九日に京城おる是を新を田舎に
此三ヶまを鼎足の如く此道法をれを
難波をもて互に京をあつたはれなり此白鳥
月夜月夜ときによつて為るもるもあ
一宵月と夜よ入て既了なれたまは
一宵月夜とき源氏と此法に新日
の夕月夜と云ふ
孝孝極明抄にナリあるアは以此まで
天にむははとの月夜夕月夜と云ふ
は一宵月と云ふはれを四り五り此法に
了出月月の十二三りあつてを

とき中へ此夕月夜にあらずむを互成此
沈をすあけもてきしめややとて落月音
月かときさるに論を―叔此句は袖日記
此歌既見ていせしうきふ新波を遍歴―
たまらぬに時を迷ひを生れとるへ―
か孫てりし通り菊に出ては糸―ありす
―ていつこさるゝむきへてを糸に心を盡て
は海は年までもおもひゆくは是詩歌連
俳風移の事さうか乃あり代集上代集を
唯中しと法頁さうとて糸とさいせし
いとけしとてゆゑのすへて袖日記は書々
杜撰多し極ヶ城は義仲は句色甚茶茶

を―らにかけり此句を介謬妄おほく―て
初心はまゝいれた手さうきれをこそ悉く書
を信じるも書さきうと―といふ守やま
かくいゝととて予々著はとこ法の世経解も
をく吟味して美否を記し後にほめしる
歌も勝手次第にすへ―

叔野坡々錯綜結倒の法さうとつちあゝめ
論く錯綜結倒は和歌一そあるはへ―十二月
不考の歌に十月は冬

夕日かけあはきるふ田舎はさし―たさ
―と法の雲に山めとる―
傳よ曰一三回二六の法さう夕日かけさ―さか

時の云ふおれきる 田舎の山めくらさけりて
 かみかきしつたふれいあはれんまをこそ
 以野坡の出入交の詩杜甫香指咏餘豔遊程
 碧梧接老几枝是豔豔咏餘香指程風會
 棲老碧梧枝と清総倒以る此介詩飲能語
 に何ほともあふへ 元禄二年に附白上
 梅に出て初遊やと一野をまのとき此白上
 三月まで此長旅をとおひてきききき
 多れを精業してけ白をぬれ定 乾徳互取
 此何り 方何ほともあり 枕以して見へ
 十六夜死月と見たりやせ 然る業
 乃再業あり

蓮池に主翁ありて業を
 けきのやと龍山の宴をひき
 りあそその酒にあやまると
 すすめてね吟たふれとなす
 ねおりの内車たきとすこや
 のをむくは

十六夜死月と見たりやせ 然る業

愚考蓮池の主翁と露依公なり 龍山の宴と
 紫衣白晋書と曰孟嘉字万年桓温参軍たり
 温去の九月九日温燕龍山一宴依畢集時
 依並著戎服有風至以士帽陸彦才不之

竟下略是と九月九日け白と十日の宴あり
杜康之詩明季此等知誰徒か達りし不通り
小町業亦此同る歌の奪胎換骨さあ世上唯
換骨と云ふりし言さる詩もやよ歌
りしやよ古人の胎を奪て骨を換る此法
たは是をよと摸写裏態とと大にお遠やり
夏文秋裏に東坡長短句云。雪恨汁水自东
流 只載一船 離恨 向西州 張文潛詩云 亭
画 軻繫春潭 唯待行人 酒半 研不 管 稠 波 与 凡
雨 載 將 離 恨 過 江 南 云 王 平 甫 涌 之 此 奪 胎
換骨法也 是別胎も一ツも骨と云ふる
換るよと云ふ

小町東葉に業平歌を言ていす 河原の岸
とき悲しの新にありと云ふ 小町は秋きぬ
の冬は秋と云ふときもたいつたをきく
中つ骨乃 滝又云ふ妻はあしと秋の夕ア
いつま又云ふお一人の玉つさときと云ふ
あはれと云ふて三十二種歌しとあはれを
あはれにあり様はきく人持子秋のゆら
まのかさきやと云ふと興も十言と
十日は海菊といつてはさきやと云ふ
まの興格歌しありも死なれと心付て元
一 業平歌の字もあはれ 和歌の
近て仍るまといへともあはれを

之不同而花有落者有不落者蓋花辨結密者不
落盛開之後淺黃者轉白而白色者漸枯紅枯干
枝上花并枝疎者多落下略寸又亦有如菊落
英といふも菊始に英の茂く是を混す一かゝる
葉以黄名する者けり其各落しありたるを
りれしありしに用されたるはふく

芝松亭

秋ふの来隣に何をすゝ人そ
此句は似解もあはと何とぞ孫をかきてはすは
唯何とぞもあきん情さりも一ほをして是は
かの炭俵の中俵の白と換やとぬとりし思ひの秋
もも似しとら

下戸に足とむき池田の月杖が
十三夜に吟きてお石酒をう

仲秋の月とさき〜形代置候
持山ゆきくさぬか逢てなふあ
たもこの月とさき〜れぬよ

木も此や勢もや〜とさき〜るの月

十之秋石山と落け〜るの月
橋柳にさき〜る月乃名秋、形
佐吉の市に立てる

非買てかぶかはふ月見の形
一書に莊子よ斗斛成而天下人始争是ありけり

升羅ふてもおどかす下はふもいん士れふおのか
さうり西しかるるまをさうり出へーとや
一書に位高名務志に曰拾遺因任吉大神宮毎年
九月十三日慶の市として大津事あり商人并お
さーかー、此やさうり幸ふを祀りさうり法人
買つてゆ。

渾かきに赤い。出たりも秋か守
哉秋にせ下りて盟盟果よかうれりり

思考大なる。さうりさうり乾坤よりさうり小なる
何れ芥子よかくれさうり千度自在の溜さうり
此白もさうり夏のやうさうり長れ活斗おれり
秋のせりりして是れを芥子粒の中に入心地さうり

とらふ奴を流しをさうり

懷老杜

幾凡や吹し管秋歎するも誰子そ

一書に三杜詩よをき悲秋強自寛無来今自及三忍
歡羞將三短髮還吹帽さうり
愚考希け世杜牧を小杜といひ杜子受やと老杜と
いふん詩よ於て、杜南はもて甲さうり七歳かとき
賦頌を上げて自称す七歳属舞多、樂天をせられて七
ヶ月さうり解書を展ふ如之無両子け指て賦る
事一百度あるもたさうりさうり曲水の
さうり身れ中けさうりさうりさうり背けさうり
西ののめりりたさうり樂天の賜をあらぬ杜子

方寸山入族口らうに新郷城かそへて十代指ふは
れしあり

胡蝶云盤風を吹てとと精例より

一本に風舞を吹てとと

臣考天和二年に吟うて夏風より

相う大く秋乃流了和事れし

松風は朝海めくして秋とせし

胡蝶云多る居事よ「我居も秋を遠く人し事さ
しつたにかくおの松風をよれけし

旅れものうさしんすてやう子

に長月六日よちれ七伴勢遷交

をかすおし又中にくきて

拾は二見にわりの流り秋 抄

一本に二見へふまじりとおれを報之是大切のて母と

まうよし味をふるし二見一初と斗おりあふ

におほく此人に此字よ心ゆいとい候るし莫恨

此如行前にはいふ人のしに蓄者におまじりとい

乞捨は二ツよおれけしと富家の海怪城よりいさ

山末を幕に「いふるし二見此うて捨捨貝合

とておあふちんりし此句につきて持くの怪及

ありといへし用ひかすりれをすてふし長月

とまは月をいめて板長く成たをう略して長月

とよはは宮を計十年同にちかすしは茂習大流り

て遷交あらしつとせ

内宮を事をささるるて外宮
此遷宮にあひて

了きたる皆おし合ぬ所 遷 宮

此秋や月より引まよふ三布 蒲 堂

元祝亭にて

ゆく秋や身を散らけきる栗の穂

一本に秋風や身を落けたるし出すを報す少秋
風を七月も八月も度す少秋の志を
見せむとて身を散らけきりとも自然とて悟あ
らざるべし

此秋此物たのもし和を蜜 樽

香雲云杜申一雙白魚不ぞ湯三寸美樽物自壽

小名木は相実亭

殊よ海よりゆつたる木末を小松川
摘ゆお茶を風は秋もききと
きけふの枝ちよらちよら秋の時面外
と知るふ葉と見つて秋の巨健茶

殊何と事を何とさく秋は丸

不見云或は方代は苑書季吟 随筆のうち此句は
秘し之概きくは性れ名白くしき
愚考なるはと其の名白と称美せしむへ之
心し秋を始とす誰かし一途よ虫はを
均作きくきを人れ葉を心下を鳥出く殊は

さーと妹は風のさびしさをむきひ珠は
岡のふりしる音れを身振るむくひく
おろく云々後ある事凡意より

風妖くすすきたに板の雨すこし
咽月七鼻の先さる光鳴る

丁突云明鏡山よこれ吟さう滝念由井ヶ濱乃
西水より坂の下とりふまよらる光鳴る
枝本座より東南よあつらう檀林は二舟て
危るさ大地さう

穂すきにおもふまさる我ら
高し水響梅は色よ志みたる

寧相ら秋を川とも冬よ近け礼は

或人予子告て云「相見ゆる所よ」つて「き
は白ら若よと教もさう」といひ来り又自昔
よも教もさうとゆふ教もさうと流さる
水さうと世間の人評判やう思意あつて
善そ云る水を御借をさぬ人れ社撰と
さうまお白れもさうとつらう「子よ飽と
やげ人よらむとさう是も虚言れもさ
うと流るるれ角とつらう之れもさ
流る牛は角とつらう実の音く「かき
くさく相やもさうをむとさう「相見ゆる
ましく相見るかさう」水此外も相を見
てもあま水よさう秋情の常くせつ

水

なまのびたふよりいふ事と牛は角よりさすとの
の突るより美自草よりかたがしとあつむひき
破るより海の船等をさくへて、愚なるが馬
耳風く

秋の夜客を序を中 柱
二人してつらつら江に 総

追加山峰よりおくる

養養門おもむ 右 御つらん
御休所の夢はさきりくは
縁傍れ登森の所や秋の風
箱書や極すてきていかくも波
必くやハ系さくくよ氣比の月
愚考必くやのあま字よよを徳よ
ハ系と唱ふる不不勝本さくは
新前よ必ハ系と称する月氣比を
一系さくくもや

越の中山
中山や越路も月と又いのち

愚考是も佐友の中山令しりし北
寺をあのいよせを越前の越北中山
と稱しるもの如し

あす此月雨ししやをむ比那う橋
比那う橋未考

丸島と永平寺の号 船橋
とりお下に十八艘をつな
きして往き此の号を渡す

橋柳をとりしるも月を志の如し

愚考 丸圍も永平寺も越前なりし
志 往還しるありし 全津 長崎
舟橋 福井 是本道なり 全津 丸圍

〔永平寺〕 福井 是服及ありし本居の号 橋柳も
に十八艘の舟橋なりし 是も橋柳此
ふふ字しりしなりし伏しや予もかの
橋道を通しし孫を志しし

衣もて小貝 拾をむいろの月
いろ此溪の小貝も茶もえんえん

勝 孫や孫も蒲 菊を喰ありし

愚考 孫もてしりし 馬士乃 傳 字
たむく 甲 品 函 なるの蒲 菊のなる馬
此地なりしとての所ある屋なりしと
考

拾 杖の尾上の 鐘や秋の書

猿をきく人猿子よ秋の風いかに
少峰の唐詠物詩選卷之七禽獸部蘇橙の
聞様の詩は秋同規々猿声起客恨猿哀
一相似謾向孤危驚客心何曾解入笙
歌耳そまの詩のまへへ

○東山月のおやうあつてま
或人のゆきとくは露の句やうし
いけておくら
悪草能くうもせよまうし山は
ふらふらなほすけいむつうさ端虫
てもあるうまうはなやほさうい
うくう

追加

秋月のそとれくちやあふも
雷の鳴よまむあやまうくは
たむいす免後を却そらわの月
是皆古調よてんえり通やう
○或人新しそ其角う蘇橙集よ丁卯の
芭蕉庵の月らんもとふ保やうてあう
名月や池をめぐりてあひす
すめてあまうそいあうは法影をあ
その空のそみ大橋よ多れて
今保川の古池たり吹よそは太和の三池は
解め何とぞ

愚老言々云々其角々自等々其角々
おのり人多きをあま〜に結その句の出来ては
悔く仕舞のまゝあり〜既ふお書て病引さくの
句の出来し和もなむ〜と〜と〜と〜と
菴の記も三夜と書改〜れ〜け外も案再々案
の句の出来し和もなむ〜と〜と〜と〜と
駕もあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と
古池〜と〜と〜と〜と〜と〜と
彼前書と〜と〜と〜と〜と〜と
在余の世〜と〜と〜と〜と〜と〜と
書と作りて〜と〜と〜と〜と〜と〜と
おのり人多きをあま〜に結その句の出来ては

嵐言よおくる。

〜と〜と〜と〜と〜と〜と
月弓や一塔の一巻 男七夕
風多や志とろ〜と〜と〜と
悦堂和尚の徳室よおれ
番も強す蘭娘菊のやとり
後家の秋物のあまれを〜と〜と
米のむら〜と〜と〜と〜と
こ〜と〜と〜と〜と〜と
愚考 芦留びとあれは是必居成〜と〜と
け〜と〜と〜と〜と〜と〜と

望田落し

雪の文かこも一よ片使宜

粟津晴嵐

さそ野分人の清くつ市の夢

俱利伽羅や三度起ても落し水

一歩も動かしとも俱利伽羅味を如賀玉もそ

落し水すつき詩もあふ又七十五丁目くら

かりやの白もくら白と味の白ともくろくを

只くらかりよ起おてハ落し水のまを又減し

名月や西よもほし一丸忘一ッ

月見せよ玉の草をからぬ先

愚考玉のち越中と接はともあり行れを

桂男すまに成りり雨の月

廿日通出るや名所三日の月

三日月やまやまは降る葉の葉

石山秋月

沙やうぬにうよけ湖秋の月

菊の家落てひろくぬここ式

草の葉はむうめさるお美式

おの文の多居よ草もなうりり

梅やいのちをかしむ草うつら

上庵牧亭よそ

草極て叶はみかの嵐うぬ

七部大鏡よくら

百景や枝の本るよくらみ草

色つゞや豆腐よ落て落る系
愚考は必産かりしの隠し是女——
奴豆腐よ産かりしをうりかけしる目よ
見る也——

これにも又水生木や系系

愚考は系系ハ系系系の時言れは木の
右側——てかの様細く對するの形容なり
水生木ハ水中よ欠くある木の形分を
考りて寸我信認めてハ考り木と云ふは
系系細く考りてあるは——と云ふ名
の考り——きつてかの考り木よ云ふは
是吉細の一癖なり

